



農村生活のすすめ

第13回：「ヒト・モノ・カネ」についてのコラム

主席研究員 川井 真

1. 欠乏の問題

都市と農山漁村を問わず、巷ではヒト・モノ・カネが足りないという声を聞く。すなわち欠乏の問題である。しかしこれらに標準値や適正規模というものが存在するのだろうか。世論の背景にも、人間の欲望を満たすためには資源が必要であるが、資源には限りがあるため、この希少な財をどのように割り振って利用すべきか、そのための手段や方法が見つからない、といった認識に基づく閉塞感が漂っているように思える。

もしそうであるならば、これは経済問題である。昨今、過剰が問題視されるのは都市部における後期高齢者の急速な増加といったことに尽きるのだろう。たしかに高齢化はリスクを増大させるため、社会保障を中心とする高齢社会対策は喫緊の課題になってくる。しかし経済を前提にするとすべてが欠乏の問題へとすり替わってしまうように思える。すなわちリスクの増大という事態が、その対応策をめぐってヒト・モノ・カネの欠乏へと置き換えられるからである。

たしかに人口構造のゆがみに加え近年のライフスタイルの変化等が、日本社会に新たな問題を生じさせているという事実はある。しかし視点を変えて、これを社会問題として捉えなおしたとき、まったく異なる対応策が見えてくるのかもしれない。

2. 社会とは何か

そもそも「社会とは何か」という問いは学

問的にも興味深いテーマである。社会科学だけをとっても、そこには政治、経済、組織、人口、社会保障、国際関係、文化、芸術、環境、思想など、多彩なアプローチが存在する。すなわち研究対象としての社会は「複雑な現象の総体」であるといっている。

そこで——かなり乱暴ではあるが——社会をイメージするために物理的・地理的な側面に着目して考察してみようと思う。その観点から見れば、国際社会や国家のような全体社会から「まち」のような部分社会に至るまで、秩序化された人間の集合があって継続的な相互行為が行われているならば、それは社会とみなすことができるからである。

たとえば、当研究所では数年前から長崎県対馬市という国境離島で「しまづくり」のプロジェクトを推進しているが、離島とはいえ、対馬はシンガポールとほぼ同じ大きさをしている。一方は日本の基礎自治体であり、もう一方は国家であるが、その面積は変わらない。しかし人口規模を比較すると、対馬の人口はシンガポールの0.6%に満たない。当然ながら二つの地域は歴史的、文化的、環境的、あるいは地政学的にも異なる状況におかれていることから、あきらかに生活様式は異なるが、どちらにも社会は存在しているのである。したがって社会とは「複数の人間が特定の空間において継続的な意思疎通と相互行為を行いながら生活を営んでいる場所」と回答しても、まんざら誤りではないのだろう。

3. 社会システムと貨幣の正体

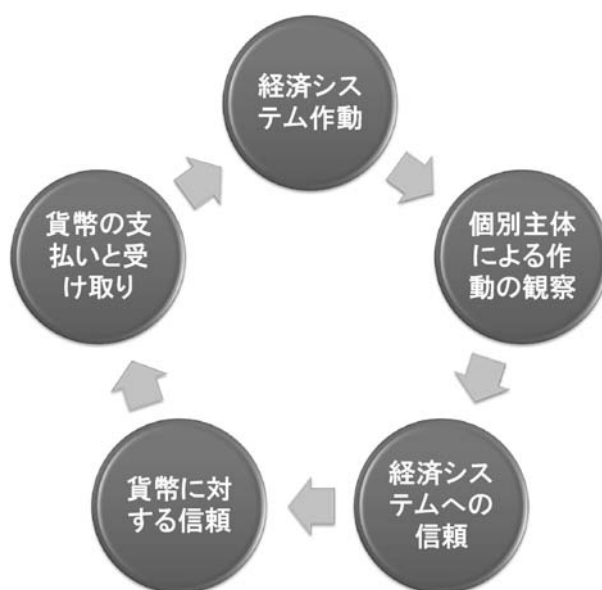
そこで思考を柔軟にするために、ニクラス・ルーマンの社会システム理論を手掛かりに社会というものを別の角度から観察してみたい。たとえばシステム理論におけるコミュニケーションはメディア（たとえば言語）を介した情報の送受信ではなく、行為と行為もしくは選択と選択を接続するための社会システムの要素となる。すると人間は社会の構成要素ではなく環境となり、その行為はコミュニケーションによって意味が与えられ、後続する新たな行為へと接続される。すなわち社会システムとは要素を自己再生産し、それを通じて自らを維持し続けるシステムであり、コミュニケーションが次々と新たなコミュニケーションを生み出していく自己再生産の総体である。

また、コミュニケーションにおける理解、伝達、そして成果に関する不確実性を取り除くための機能を担うのがコミュニケーション・

メディアであり、具体的には言語、拡充メディア（文字・印刷・通信）、象徴的に一般化したメディア（貨幣・権力・真理性）の3つがある。着目したいのは、象徴的に一般化したメディアに含まれる「貨幣」の存在である。貨幣は「支払い」というコミュニケーションを媒介するメディアであるが——コミュニケーションと同様に——支払いが次々と新たな支払いを生み出すという自己再生産の機能をもつ。それにより、社会の部分システムであるはずの経済システムの内部に新たな自己再生産の構造を生じさせることになった。

しかし経済システムが自己再生産の機能を維持するためには貨幣に対する信頼が不可欠である。この信頼は再帰と内省によってつくられる。すなわちシステムの作動を観察することにより、貨幣に対する信頼がさらなる貨幣に対する信頼をつくりだすという自己準拠的なループが生まれ、経済システムへの信頼は担保されるのである（下図参照）。

図：経済システムにおける再帰と内省



ルーマンが貨幣を象徴的に一般化したメディアと呼ぶのは、貨幣が「時間」の制約を受けず、相手の「動機」や「人格」を問うこともなく、すべてを結びつける機能を有しているからである。貨幣は市場原理と足並みをそろえながら不可逆的に前進を続ける。それはコミュニケーションを求めず、記憶を残さず、感情もなく、文化や環境を保全しようとする意志もない。

ここで大切なことは、成長と拡大を求めて走り続けることが市場の原理であったとしても、それは人間の宿命ではないということである。

現代においては、コミュニティ機能ならびに自給能力の衰退が貨幣依存度を高め、貨幣の必要性を際立たせている。貨幣が社会の表舞台に登場したことで、すべての問題が欠乏問題へとすり替えられてしまった。この状況から抜け出すためにも、社会システムを浸食しはじめた貨幣メディアを経済システムの内にもどし、メディアによる領域侵犯を抑制しなければならない。

4. 社会の貨幣依存度

さて、社会問題へと話を戻そう。上述したとおり、社会については一般的・標準的な枠組みを決定するのは難しい。対馬とシンガポールの例からも推測されるように、面積や人口規模、また基礎自治体であるか国家であるかを問わず、その外部には、ひとりの人間を中心とする同心円状に広がる多くの社会が存在し、そこには入れ子のようにお互いを刺激し合い、ときには抑圧し、あるいは共鳴しながら、ゆるやかに姿を変えていく複雑な構造を持った世界がある。したがって社会問題と向き合う場合には、社会というものを「まち

もしくは「生活圏」として認識できる範囲に限定すべきなのだろう。なぜなら、その範囲を超えると当事者にはなり得ないからである。

さらにヒト・モノ・カネの欠乏問題に関しても都市と農山漁村ではその本質が異なるのではないかと思われる。貨幣依存度の高い社会は——自由ではあるが——孤立を招きやすく、社会を維持するためには成長と拡大を続けることが宿命になる。したがって人口規模は拡大するが、社会的な変化、たとえば今日のような高齢社会に至ると脆弱な側面が露呈してリスクの高い社会となる。一方で、貨幣依存度の低い社会は——自由度は制限されるが——社会の安寧を得やすく、条件さえ整えば持続可能性も高まる。その条件とは、自助と共助の機能をもち住民の多くが自給能力を有するような社会が形成されているということである。

5. 縮小しながら発展する未来

すくなくとも現代社会が抱えているのは「欠乏問題」ではなく「過剰問題」であろう。たしかに農山漁村にも過剰問題は存在する。シカやイノシシを中心とする有害鳥獣の増加である。この特異な現象もまた、人間が自然あるいは野生と距離を置くようになったことに端を発している。すべては人間界と自然界のバランスが崩れたことに起因しているといっている。このような状況はお互いにとって不幸である。シカやイノシシもまた無限に増え続けることはできないのだから、彼らの未来も閉ざされている。

フランスの思想家ジョルジュ・バタイユは『呪われた部分 有用性の限界』のなかで「地球の表面においては、生物全般にとって、エ

エネルギーは常に過剰な状態にあり、問題は常に奢侈の用語で設定され、選択は富の浪費形態に限定される、「^{けつぼう}缺乏が問題になるのは、個々の生命体、もしくは生命体の限られた集合にとってだけである」と語ったが、まさに本質をついている。バタイユの思想は「富の源泉は地球に惜しみなく降り注ぐ太陽エネルギーにある」という言葉に凝縮されているのだが、なるほど、自然と共生する限りにおいて欠乏が問題になることはないだろう。

たしかに人間の潜在的欲望は尽きることはないかもしれないが、現代において、とりわけ先進諸国では、そのもっとも基本となる生存のための欲求はすでに満たされているといっている。すくなくとも人類は生存に関わる以上のモノをつくりだす生産力を持っている。すなわちモノは過剰に存在しているのである。日本はこれから本格的な人口減少時代を迎える。したがって成長拡大路線とは異なる「縮小しながら発展する未来」のために、ヒト・モノ・カネの役割そして自然からの贈与について、再考してみてもいいのではないだろうか。

【参考文献】

- ・ニクラス・ルーマン著 土方透、大澤善信訳 (2016) 『自己言及性について』筑摩書房
- ・ニクラス・ルーマン著 ディルク・ベッカー編 土方透監訳 (2007) 『システム理論入門』新泉社
- ・J. ハーバーマス, N. ルーマン著 佐藤嘉一 [ほか] 訳 (1984) 『批判理論と社会システム理論』木鐸社
- ・春日淳一 (2003) 『貨幣論のルーマン：“社会の経済” 講義』勁草書房
- ・ジョルジュ・バタイユ著 中山元訳 (2003) 『呪われた部分 有用性の限界』筑摩書房